

日本歌人叢書

歌
集

猪
名
野

山
村
貴
美

昭和四十九年十月印刷
昭和四十九年十一月發行

定価 二千円

書野
叢名
歌人猪
日本歌集

著者 山村貴美
尼崎市東園田町六丁目四八の八

印刷所 共栄商業株式会社

發行所

尼崎市東園田町六丁目四八の八
山村貴美方日本歌人阪神支部

目次

除夜の鐘
 初雪
 冬の空
 豫感
 父の死
 尉と姥
 秋興
 安芸の宮島
 呉港
 廣島にて
 音戸の瀬戸
 秋吉台
 賭
 日光に遊ぶ

(二四首)
 (五首)
 (三四首)
 (四首)
 (四首)
 (一七首)
 (八五首)
 (八首)
 (五首)
 (二首)
 (四首)
 (二一首)
 (七首)
 (一〇首)

三
 八
 〇
 一
 一八
 二〇
 二二
 二八
 五八
 六〇
 六二
 六三
 六五
 六九
 七二

三井寺
 孤雁の圖
 名月風狂の徒
 夜香木
 法師蟬
 初秋
 高野山
 晩夏
 兜蝦
 銀閣寺
 暗き天体
 立山の銀の盃
 街
 逃水

(四首)
 (四首)
 (二首)
 (五首)
 (五首)
 (二首)
 (二首)
 (二首)
 (七首)
 (五首)
 (八首)
 (二首)
 (二首)
 (二首)
 (四首)

七六
 七八
 八〇
 八五
 八七
 八九
 九九
 一〇三
 一〇八
 一一一
 一二三
 一二六
 一二二
 一二八

蛙	(八首)	一三〇
蛭	(四首)	一三三
香住の海	(二〇首)	一三五
六甲山高山植物園	(二六首)	一三九
白き鳩	(二三首)	一四五
夜間飛行	(七首)	一五〇
孫守り	(二六首)	一五三
黃牡丹	(七首)	一五九
春の百舌鳥	(七首)	一六二
晩春	(二〇首)	一六五
娘道成寺	(五首)	一六九
桜	(二〇首)	一七一
ゆく雲	(一九首)	一七五
白き蝶	(二三首)	一八二

花喰鳥

(二六首)

一九〇

大雪

(四首)

一九六

節分の夜

(七首)

一九八

きさらぎの空

(二八首)

二〇一

田能遺跡

(二〇首)

二二一

笹

(五首)

二二五

新春

(一〇首)

二二七

あとがき

二三三

題字

前川佐美雄

序歌

前川佐美雄

猪名野

除夜の鐘

大き雲変貌し
つつ流らふを世の移りとも見
つ怖るる

浮雲は西の空よりながれきて
変貌し
つつ碧空
に消ゆ

流れつつ消えゆく雲のあともなき虚しき空の
下に死がある

ひとつ雲生れて流れて消えゆくを残りの命惜
しみて生きむ

鉄塔に鳥とまりてわが家向き不吉が来ると鳴
きてゐたりき

鉄塔にとまりて啞々^{あゝ}と鳴く烏おほつもごりを
凶と占ふ

返照の中に今在りいくばくもなくて暮れゆく
よと思ひつつ

祈りつつ天平人も聴きつらむ奈良の都の除夜
の鐘の音

古都の鐘の余韻はながし天平の風に流れゆく
堂塔の上

天平の奈良の都の除夜の鐘を師はききまさむ
我はテレビに

天平の鐘の余韻の消えゆくををしみもあへず
暦たちかへる（還暦）

昆陽寺の鐘かも知れず北空より枕に響く除夜の鐘の音

釣鐘を供出してより除夜の鐘のつひにならざる寺もあるらし

雪の上をこもりて鳴りし北国の鐘の音も杳き思出となる

初雪

戸を開くれば紅葉散り敷く苔の上にかのこま
だらの今朝の初雪

くれなるの楓紅葉に雪積り思ひもよらぬ今朝
の初雪

初雪の朝の庭に鶉どりのつがひが木々の雪散らしをる

霜よけを怠りしかばいたみやすき観音竹に雪を積らす

北国の冬は雪野をふるさとと初雪の陽に消ゆくを惜しむ